

## 小口雅史編

### 『律令制と日本古代国家』

十川 陽一

本書は、小口雅史氏の還暦を記念して編まれた二冊目の論文集である。律令制と日本の古代国家に関わる十六本の論文を、おおよそのテーマごとに三部に構成したものとなっている。以下、本書の構成に従って内容を紹介しつつ、一部所感を述べてゆきたい。

「Ⅰ 日本古代の王権と外交」は外交・王権に関する諸論考を収める。熊谷公男「『東夷の小帝国』論と「任那」問題―倭国の対外関係史の再検討―」は、律令制以前の倭国の対外関係を再検討するために、石母田正氏の『東夷の小帝国』論を再評価する。その上で、広開土王の時代から倭の五王の時代にかけて、倭が任那との強固な関係を軸として軍事力を背景にした『帝国主義』的な理念に基づいて対外関係を構築していたことを論じる。

稲田奈津子「古代王権と遺詔」は、持続し堀河までの遺詔を通時代的に分析。さらに唐代の皇帝遺詔との比較も踏まえて、日本古代の遺詔は、天下百姓に布告することを前提としないものであり、即位儀礼においても重要な位置を占めない私的な性格を一貫して有していたことを論じる。シンプルな表に基づいて通時代的に論じたものであり、分かりやすい議論となっているが、個別の遺詔の詳細などは取り上げられていないため今後の検証も必要となろう。

大山誠一「天皇制を考える」は、具体的な権力を持たない天皇の存在は大宝律令で成立したこと、藤原不比等の構想により、藤原氏が外戚として天皇の権威と国制を連結させ、天皇の潜在的な権力を顕在化させたとする。不比等の構想であるという点について、藤原氏が事実上不比等一人であったことを一つの論拠とするが、かかる時代において不比等が藤原氏のための構想をした、という論理など、結果論にも思われるが、どうか。

森公章「延暦度遣唐使三題」は、延暦の遣唐使について、承和の遣唐使との対比から検討する。延暦の経験を踏まえて、承和の遣唐使船が暴風雨の際に輪田泊への待避や新羅人の航海技術の活用がなされたこと。承和の遣新羅使が遣唐使保護の依頼によってなされたこと。さらに、延暦の遣唐使は天皇の礼楽面を支える楽舞の伝習という課題があり、承和度はそれを基盤とした日本的な改変・定着が行われる端緒となつてゆくこと。などを指摘する。

江渡俊裕「一世源氏元服に関する試論」は、元服儀のあり方から一世源氏の意味を論じる。皇子と一世源氏の間には明確な身分差がある一方、賜姓後であっても一世源氏は「臣下」ではなく「皇子」との同一性を持ち、特に内裏で元服が行われる場合には「皇子」としての恩恵が強いとする。興味深い指摘であるが、親王と皇子との同一性について、元服儀参加への賜禄を、節禄に関する議論を援用しながら、天皇と官人の結合を媒介する役割を果たしたと説明するが、節禄と同質のものとして扱われるべきかという点は、もう一步踏み込んだ検討が必要ではないか。

新井重行「皇子女の五十日・百日の祝について」は、皇子女の誕生儀

礼のうち、五十日・百日の祝の時代的変遷に注目し、詳しい史料が残りこれまで典型例と位置づけられていた道長期を、儀礼整備の画期と評価。従来私的に行われていたものを、道長の主導によって自らの権力の超越性を誇示する装置として朝廷行事に取り込んだと論じる。

「Ⅱ 律令田制をめぐって」は田制に関する論考からなる。

三谷芳幸「班田制と律令法」は、唐の均田制が、井田法以来の理念的な性格が強いのに対し、日本の班田制は現実的な機能の重視や、郷土法など地域の実態に対する中央政府の干渉の強さが特徴と論じる。

佐々田悠「田令田長条に関する覚え書き」は、先行研究を概観しながら、同条をめぐる諸問題について再検討したもの。八世紀においても、大宝令以前の七世紀後半の土地支配のありかたが広く知られており、古記の法解釈などでも用いられたとする。

北村安裕「大宝田令六年一班条と初期班田制」天聖令を用いつつ、大宝令の六年一班条の復原案を提示。口分田を得て六年以内に死去した際には、次々回班田時に収公する特例が、浄御原令制以来存在したことなどを論じる。初回班田直後の死者や乳幼児の死者が多数にのぼることが予想されたために、収公を猶予して人口増加によって相殺を期待した措置であったとするが、乳幼児の死者が多い中で人口増加が期待された事情など、もう少し説明が必要な部分も残る。

森田悌「田令集解従便近条の考察」は、集解諸説の検討から、「近及遠」の具体的な方法や、「犬牙」な（犬の牙が相当たらずして含み入る状態）郡界・口分田の様相、さらには受田の実態にも論及する。集解と正面から向き合い、自説を組み上げてゆく姿勢には改めて学ぶところ

も大きい。

「Ⅲ 律令制下の官僚制と地方」は、地方を巡る諸動向と官人制関連の論文からなる。

原京子「古代東国における七世紀後半から八世紀初頭における交易体制―湖西産須恵器の分布を中心に―」は、湖西産須恵器の東国への分布状況から、海上交通を通じた東国の交易体制について検討したもの。東海地域から東国へのルートとして、埼玉県行田市の築道下遺跡のような河川に設けられた津や、太平洋における中継点として想定される伊豆大島の和泉浜C遺跡などの事例を踏まえ、地域有力者の手元に水上交通を中心とした交易権が残っていたことを指摘する。モノに即して水上交通のあり方を立体的に位置づけた労作。ただ、地域有力者の下に交易件を「残した」という点については、そこまで支配が及ばなかったとみるか、残さざるを得なかったとみるか、などいくつか評価の幅はあろう。今後の議論の展開を期待したい。

鐘江宏之「文書の授受からみた天平五・六年における出雲国司の活動」は、計帳帳から国司と中央・節度使などとのやり取りを整理。平城・難波両京造営の中での人々の逃亡と代替者の送り出しが、奈良時代を通じて全国的な課題であること、出雲や隠岐の事例が節度使やその他上級地方官司を考える参照系になる可能性を指摘する。

虎尾達哉「弘仁六年給季禄儀における式兵両省相論をめぐって―律令制下官司統制管見―」は、弘仁六年二月に発生した武官列立をめぐる式部・兵部両省の相論（『類聚三代格』同年十一月十四日官符）を手がかりに、式部省の持つ強大な権限と太政官からの独立性を論じる。事実関

係は首肯されるとしても、本稿は基本的に「官司」という機構を主体に検討したものであり、その背後の政治的な動向や国家的な構想の有無が気にかかる。なお虎尾氏の関連する論考として、「律令官人群の形成」(『講座 畿内の古代学 第1巻 畿内制』二〇一八年)があるが、ここでもこれらの問題は十分に論じられていないように思われる。

山下信一郎「平安時代中期の位禄制の評価をめぐる覚書」は、位禄定を軸に位禄制を検討したもの。政務のあり方が貞観年間に外国支給が一般化して以降に実態的に形成され、延喜七年の年料別納租穀制の成立によって定式化されたこと。儀式書の分析から、一般の四位・五位層に対する支給手続きが行われていたことなどから、十世紀後半以降においても位禄制度がそれなりに機能していた可能性を論じる。

「IV 唐制と日本」は、中国史料の紹介・分析に関わる論考二篇である。いずれも日唐律令制比較にとって重要な成果である。

丸山裕美子「唐医疾令断簡(大谷三三三七)の発見と日本医疾令―劉子凡「大谷文書唐《医疾令》・《喪葬令》残片研究」を受けて―」は、新発見の大谷文書を踏まえ、天聖医疾令に基づく復原唐令の条文排列を修正しつつ日本令の復元案を提示しながら日唐比較を行う。医師不足で地方まで手が回らない中でも、唐制に近づけるべく唐令を忠実に継受する姿を論じる。

坂上康俊「文苑英華の判の背景となる唐令について」は、唐令復元研究の素材ともなる判(裁判の判決を中心とした決裁文)について、詳細な研究史整理と、『文苑英華』に収録された判の内容とその背景となる唐令、さらに中華書局本に欠けている巻の翻刻と、同書所収の判の一覧

を紹介する。

以上、雑駁ながら本書所収論文の内容を紹介し、一部については感じたところを述べた。それぞれ重厚なテーマを扱った極めて読み応えのある一冊となっており、いわゆる王道の研究テーマについても、緻密な史料解釈から新しい見解を打ち出す余地が十分に残されていることが実践的に示されているといえよう。評者の浅学ゆえ、概要紹介と書いた範囲での部分的な所感を述べるに終始し、行き届かない書評となったことをお詫びしつつ、小評を終えたい。

(A5判、三七八頁、同成社、二〇一八年十月刊行、本体価格七五〇〇円＋税)

(そがわ・よういち 山形大学人文社会科学部准教授)